

井上清編
渡部徹編

米騒動の研究 第一巻 第二巻

「米騒動をどのように評価し、そこにどんな学問的課題を見出し、あるいは、そこからどんな実践的教訓をひきだすにしても、まず、米騒動とはどんなものであつたか、その実体を全国的規模で詳細に明らかにする仕事が必要である。その仕事を果すために、私たち京都大学人文科学研究所の日本部では、一九五四（昭和二九）年夏以来、米騒動研究班をもうけた」（はしがき）。その成果が本書であり、ここに示るされた通り、これは米騒動の実証的研究、というよりはむしろ整理された資料集といつた書物である。

資料は主として、もと大原社会問題研究所において細川嘉六氏が、事件担当弁護士布施辰治氏の協力を得て蒐集された二五〇字詰原稿用紙六万枚におよぶ新聞報道・裁判記録により、これにその後の諸研究と著者たちの実地調査により得たデータをもとにしている。

第一巻は、全国的概要のほか、富山・愛知・京都・静岡・岐阜・三重の六府県、第二巻は大阪・和歌山・奈良・滋賀の四府県について述べており、騒動の全面的な分析と歴史的位置づけは第五巻にゆずられるとのことであるが、ここに示された事実だけからしても、従来の諸研究の評価に対して大幅な訂正と補足を要求しているように思える。

第一次大戦後の通貨膨脹・国際収支の大黒字による正貨の激増・金融緩慢・インフレーション等を背景とする物価の騰貴は、米生産費の高騰をもたらし、一方、工鉱商業の急速な発展と離農化の進行は、都市においてはその居住人口の大戦前の二割増加という現象に、農村では労働力の不足に結果し、加えて、農家消費の増大・酒造米の増加があり、米の需給関係に大きな変動が起きるにいたつた。当時は、好況下であつたので、定職をもつ者でなくても、車挽きや日雇い人夫でも結構仕事はあつた。「米が暴騰しないうちは、働く者は何とか食つて行けた」ところへ、内地の輸送難やその不手際が投機を誘発し、米価は高騰し人心は不安におとし入れられるに至る。

こうした状況の下で起きた騒動は三つの時期に区分される。七月下旬から八月九日までの第一期は、いわゆる越中の女一揆と呼ばれた富山県下の示威・実力行動。一〇日から一六日までの第二期は騒動が全国化し大中都市中心に起きたもので、狭義の米騒動はこの時期にあたる。第三期はその後九月一七日の明治炭坑争議まで、地方町村へ伝播し、同時に各地で炭坑争議が暴動化した。米騒動を「米価の急激な暴騰により生活難におちいつた民衆が、生活をまもるためにおこした大衆行動」と広義に解する著者の立場からすればこれら炭坑争議もその中に含まれる。

かくて騒動は一道三府四三県のうち、青森・岩手・秋田の東北三県と栃木・沖繩両県をのぞく全国に波及し、暴動または示威行動のあつた「Aクラス」の事件発生地は三一〇カ所におよんだ（発生地一覧表）。この数字は、従来の研究の示すところより三割以上も多い。騒動には、居住群集型と階級結合型の二類型があり、前者はさまざまな職業や階層の者がその住む土地の共通性にもとずいて集団となり、米価引下げ・生活救済を要求するもの、後者は、資本家にたいする労働争議、小作人

の地主にたいする争議と結びついて起きたものである。両者の相互関係についていえば、前者の街頭暴動の激化が後者の労働争議や農民闘争を触発激化したのであつて、その逆ではない。しかも、前者が後者に発展したというわけでもなく、両者は別の所で同時に併存したのである。

参加階層の主体は人夫・車夫・仲仕等の労働者、各種職人、陶器などのマニユファクチュア労働者、農村では貧農・農村プロレタリア、漁村では漁民・仲仕等であつて、近代の工場労働者は、神戸のような工業都市で多く見られても被検挙者の一割二分にすぎず、そのほかでは殆ど無い。彼らが参加した場合も、仕事を終つて帰宅してから夜間の騒動に群集の一人として参加したのである。そういう意味からも、騒動参加者に明確な階級意識をみることはできない。どちらかといえば、著者もいうように幕末のうちこわしに共通する面が多い。もちろん、そのもつ意義は異なるであろうが、それはこの巻ではふれていない。

介
京都市の被起訴者についてみると、日給一円（月給二〇—二五円）前後で、その日暮しの日雇・職人が多い。被差別部落民の参加し

た所は騒動も激烈になつた所が多いが、それは部落民が右の「細民」の条件をもつとも多くそなえていたからであつて、生活の安定した部落や、静岡県などのように全然部落民の参加していない所もある。騒動は大がい一日二日バツともえつくして終りになり、しかも夜起る。この起り方からみても、指導性とか組織性は全く考えられない。彼ら前期の労働者や職人は、昼間はその無数の仕事に分散しており、夜にしか集れないからである。したがつて、その政治意識に部分的な鋭さがあつたとしても、それを結集する条件に欠けていた。これを全国的に組織したのは新聞であつた。著者は、ここにブルジョア君主制への変革の可能性をみるのである（実現はしなかつた）。

政府側の対策は、直接には警察・軍隊の行動により暴動を鎮圧するとともに、窮民調査・剩余米整理・寄附・施米・廉売・米価取締などが一般的であつた（これもうちこわしの対策とそつくりである）。

叙述は、府県ごとに生活状況・騒動の表情・取締・救済対策の順に分け、最後にその府県の被起訴者一覧を附している。表の割付けも

工夫のあとがみえて見やすい。使用した資料が新聞報道・地方公文書・裁判記録によつてゐるため、実際とちがつている点もある。これも著者たちの実地調査によつて一部たしかめられているが、今後の研究の出発点をきづくという当初の意図は十二分に達せられてゐるとしてよい。近代史の研究がこうした実証的な著作を生み出しつつあることは喜ばしいことである。これを土台として、さらに各地の实情が明らかにされることが望まれよう。

以上、本書の意図と内容をあらまし紹介したが、全体に資料をもつて語らせる方法をとつてゐるので、騒動の実況や首謀者の演説などいかにも生き生きとしていて、読み出すとちよつと止められぬ面白さもあり、半ば義務的に読まはじめた筆者もとうとう夜を徹してしまふ始末であつた。紹介という見地からすれば、こうした側面も書き落すわけにはゆくまい。（有斐閣発行、第一巻 A5判五〇三頁、定価九五〇円、第二巻 同三三〇頁、五八〇円）
（朝尾直弘）